

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第18回東邦大学医療センター佐倉病院内科学講座例会および第15回東邦医学会佐倉内科分科会
作成者（著者）	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(2). p.58-64.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD46909984

第18回東邦大学医療センター佐倉病院内科学講座例会 および第15回東邦医学会佐倉内科分科会

2022年12月11日（日）10時～16時
東邦大学医療センター佐倉病院 7F 講堂

開会の挨拶 松岡克善

第I部 学内研究発表

座長：山口 崇，金子開知

A グループ

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）入院患者，485例の検討

入江祐介

2020年4月～2022年10月までにCOVID-19のために485例が入院，23例が重症化し，12例が死亡した．時期ごとの臨床像の変遷および重症化リスク分析について，後方視的に解析し報告する．

B グループ

C5変異の抗酸化能検討および，心血管イベント・CAVIの前向き試験の検討

阿部一輝

既報によりChEのC5変異の有無は心血管イベントを抑制することが示唆された．今回，我々はランダムに患者を抽出し，C5変異の有無や各種パラメーターの経時的推移に対して前向き研究を実施中であり，今回は横断研究結果を提示する．

C グループ

心不全に対する和温療法の有効性とCAVIの関係

中神隆洋

和温療法は慢性心不全に有効であるとされているが，全ての患者が治療に反応するわけではない．我々は治療効果の反応性の違いを，CAVIを用いた血管弾性機能の関心に注目し，当院で行った症例を後ろ向きに検討した．

D グループ

Biologics時代におけるステロイド治療を受けた潰瘍性大腸炎患者の自然史

宮村美幸

潰瘍性大腸炎においてステロイドは強力な寛解導入効果を有するが，ステロイド漸減中や中止とともに約30%の患者で再燃する．ステロイド治療を受けた潰瘍性大腸炎患者の経過を解析し，ステロイド治療の有効性，特に2回目の治療の有効性を明らかにする．

E グループ

転倒関連手術を引き起こす脳疾患について

澤井 撰

転倒関連手術の背景となる脳疾患を調査した。大腿骨転子部骨折ではアルツハイマー病と多発性脳梗塞の合併が多く、硬膜下血腫ではアルコール性認知症が多かった。患者ケアの観点から、これらに留意する必要がある。

F グループ

血液透析導入期における鉄欠乏と心予後の関係

日高 舞

鉄欠乏は心筋の病的リモデリングを悪化させる。今回我々は、末期腎不全患者における鉄欠乏と左室収縮能障害により4群別化し心予後を調査し、EF<50%群の鉄欠乏は心臓死への独立危険因子であることを明らかとした。

第 II 部 前期 1 年目研修医発表

座長 清水一寛, 山田哲弘

1. 心臓原発性悪性リンパ腫が徐脈頻脈症候群を引き起こした I 例

永井真行

指導医名：渡邊康弘, 山岡周平, 清水直美 (B グループ)

不整脈の精査目的で循環器内科を受診した 66 歳男性。精査の結果、心臓原発性悪性リンパ腫が発覚し、不整脈は心内浸潤による徐脈頻脈症候群に由来するものであった。まれなタイプの悪性リンパ腫であり、報告する。

2. 体液管理に難渋した閉塞性肥大型心筋症の一例

佐藤孝信

指導医名：清川 甫 (グループ C)

62 歳女性。今回、閉塞性肥大型心筋症と心嚢液貯留、頻脈性心房細動を契機とした HFpEF の診断で入院となった。左室内腔の狭小化もあり、体液管理に難渋した症例を経験したため、文献的考察を交えて報告する。

3. 不明熱精査中に血小板減少をきたしステロイドが著効した一例

小田翔斗

指導医名：内堀 超 (A グループ)

80 歳女性。発熱持続で紹介受診。胸部 CT で慢性気管支炎が疑われ抗生剤加療を行ったが改善に乏しく、原因精査中に突然血小板低下をきたした。ステロイドを開始したところ、速やかに状態改善に至った症例を経験した。文献的考察を交えて報告する。

4. 口腔内感染が原因となった肝膿瘍の一例

相川優大

指導医名：木村道明 (D グループ)

Crohn 病で消化器内科通院中の 31 歳男性。肝膿瘍で入院となったが、培養検査で P. micra 等の口腔内常在菌が起病菌と考えられた。口腔内常在菌による肝膿瘍は稀であり、文献的考察を交えて報告する。

5. インフリキシマブによる薬剤性ニューロパチーの一例

大久保彩子

指導医名：澤井 撰, 鈴木隆一 (E グループ)

潰瘍性大腸炎を加療中の 45 歳男性。四肢の痺れと痛みが出現し歩行困難となった。末梢神経障害を認め、さらに心機能障害や脳梁膨大部病変がみられた。原因は潰瘍性大腸炎の治療薬であるインフリキシマブと考えられた。文献的考察を交えて報告する。

6. たこつぼ症候群を発症した肺腺癌 Stage IVb の一例

竹谷 健

指導医名：戸谷俊介（グループ C）

たこつぼ症候群は精神的・身体的ストレスに起因する一過性の心筋収縮低下をきたす疾患である。今回は肺腺癌診断後にたこつぼ症候群を発症した症例を経験したため、悪性腫瘍の存在とたこつぼ症候群との関連性について文献的考察を交えて報告する。

7. ステロイド減量中に再燃がみられた間質性腎炎の一例

二宮寛興

指導医名：高橋 禎, 大橋 靖（グループ F）

胆石性膵炎に対し加療中に十二指腸穿孔、急性腎障害を合併し腎臓内科へ紹介となった。急性間質性腎炎の診断でステロイドによる加療を開始したが、ステロイド減量の途中で再度腎障害が出現した。原因を含め考察する。

8. 抗 EJ 抗体陽性間質性肺炎の一例

木島優太

指導医名：入江祐介, 若林宏樹（グループ A）

COVID-19 感染症療養後より増悪した労作時息切れを主訴に受診した 55 歳女性。抗 EJ 抗体陽性間質性肺炎合併の抗 ARS 抗体症候群と診断した。皮膚所見と経過より COVID-19 感染症との関連も示唆された症例であり、文献的考察を踏まえて報告する。

9. 内臓/皮下脂肪型肥満患者における減量・代謝改善手術の効果の比較

秦 弘海

指導医名：渡邊康弘（グループ B）

内臓/皮下脂肪面積比（V/S 比）が異なる肥満症患者 2 名において V/S 比が低い患者がより大きく減量した。V/S 比の違いが減量効果の違いに影響するか、減量・代謝改善手術のデータを用いて後ろ向きに解析する。

第 III 部 後期研修医発表

座長 澤井 撰, 飯塚卓夫

1. Bechet 病に合併した骨髄異形成症候群、胆管癌の一例

田宮創希

指導医名：山田哲弘（D グループ）

Bechet 病に合併した骨髄異形成症候群、胆管癌で加療中の 75 歳男性。近年 Bechet 病と骨髄異形成症候群の関連が示唆されている。本症例では胆管癌の関連についても文献的考察を交えて報告する。

2. 意識障害の鑑別でトルエン中毒の診断に至った 1 例

藤川裕成

指導医名：大橋 靖（E グループ）、一林 亮

交通事故を主訴に救急搬送された意識障害の 54 歳男性。反応不良性のアシドーシスによる意識障害の鑑別の結果、近位尿細管障害型のトルエン中毒の診断に至った。先進国でのトルエン中毒の報告は稀であり、従来の尿細管障害の診断に用いた負荷試験検査について文献的考察を加えて報告する。

3. 急性期疾患の栄養管理の重要性を実感した一例

福田光史

指導医名：田中 翔（B グループ）

び慢性体細胞型 B 細胞リンパ腫の診断で化学療法中に消化管穿孔となった 78 歳女性。手術までの期間、抗生剤加療と栄養管理を行い、栄養管理の重要性を再確認できた 1 例を経験したため、文献的考察を含め報告する。

4. 両側性難聴から顕微鏡的多発血管炎と診断された1例

鈴木隆一

指導医名：金子開知（グループA）

76歳女性。両側性難聴を主訴に受診。難治性中耳炎、多発単神経炎、MPO-ANCA陽性を認め顕微鏡的多発血管炎と診断し、ステロイドとリツキシマブの併用により症状軽快した症例を経験した。文献的考察を含め報告する。

5. 急性扁桃炎と診断された Lemierre 症候群の1例

櫻井大雅

指導医名：若林宏樹（Aグループ）

Killer sore throat は感冒と鑑別を要する重要な疾患群である。我々は当初抗原検査でA群溶連菌による急性扁桃炎と診断された Lemierre 症候群の1例を経験した。救急外来における示唆に富む症例と考え報告とする。

第IV部 出向中医師発表

座長 清水直美, 高橋真生

1. ネフローゼ症候群を発症し腎生検から診断を得ることができた MGRS (monoclonal gammopathy of renal significance) の一例

吉田規人

指導医名：倉本充彦（成田赤十字病院 腎臓内科部長）

多発性骨髄腫の前段階としての MGUS (monoclonal gammopathy of undetermined significance) を含め、M蛋白が腎障害の病態に関与する疾患 (MGRS) がある。近年は疾患概念が広がってきており、今回はネフローゼを主訴とし腎生検にて MGRS と診断し治療した症例について紹介する。

2. 緑内障点眼薬を契機に房室ブロックによる意識障害を発症した一例

坂口吉朗

指導医名：田中宏明（聖隷佐倉市民病院）

76歳女性。尿路感染症後の遷延する腎機能障害の精査加療目的に入院。腎生検実施4日後に突然房室ブロックによる意識障害を発症。徐脈と意識障害の原因精査目的に転院。緑内障点眼薬と腎不全に伴う体内蓄積によるβ遮断作用の増強が原因として疑われる。稀な症例であり文献的考察を加えて報告する。

3. SGLT2 阻害薬併用1型糖尿病患者で糖尿病性ケトアシドーシス (DKA) を発症した一例

白井萌子

指導医名：柴田貴久（いすみ医療センター）

49歳女性。嘔気、食欲不振を主訴に受診。SGLT2 阻害薬併用1型糖尿病患者で、シックデイ中も内服継続をしたことでDKAを発症し、持続インスリン療法を行った。SGLT2 阻害薬の適正使用の重要性を含め文献的考察を交え報告する。

4. 重症三尖弁狭窄症に対し経皮的バルーン三尖弁形成術を行った一例

池田拓史

指導医名：橋口直貴（成田赤十字病院）

61歳女性。26年前に感染性心内膜炎で三尖弁閉鎖不全症を合併し、三尖弁置換術を行った。X年10月、重症三尖弁狭窄症を原因とした心不全で入院し、経皮的バルーン三尖弁形成術 (PTTBV) を施行し心不全は改善した。文献的考察を交えてこの1例を報告する。

第 V 部 今年度優秀論文賞（白井賞）

座長 齋木厚人, 授与 白井厚治

渡邊康弘

Characteristics of Childhood Onset and Post-Puberty Onset Obesity and Weight Regain after Laparoscopic Sleeve Gastrectomy in Japanese Subjects: A Subgroup Analysis of J-SMART

第 VI 部 特別講演

座長 榊原隆次

講師：藤岡俊樹 先生

東邦大学医療センター大橋病院 脳神経内科 教授

演題：「免疫介在性ニューロパチー from bedside to bench, bench to bedside」

略歴：

藤岡俊樹（ふじおか としき）

1976年3月 東邦大学附属東邦高等学校卒業
 1976年4月 東邦大学医学部入学
 1982年3月 東邦大学医学部卒業
 1982年4月 第73回医師国家試験合格（医籍登録番号268927号）
 1982年6月 東邦大学医学部附属大橋病院 研修医
 1984年6月 東邦大学医学部内科学第4講座研究生
 1984年7月 東邦大学医学部内科学第4講座助手
 1995年6月 米国ペンシルヴァニア大学医学部神経学教室留学
 1998年11月 東邦大学医学部内科学第4講座助手
 1999年10月 東邦大学医学部内科学第4講座講師
 2003年5月 東邦大学医学部内科学第1講座講師
 2003年6月 東邦大学医学部内科学講座（大森）神経内科学分野講師
 2006年6月 東邦大学医学部内科学講座（大森）神経内科学分野助教授
 2007年10月 東邦大学医学部内科学講座（大橋）神経内科学分野准教授
 2008年4月 東邦大学医学部内科学講座（大橋）神経内科学分野教授
 2008年4月 大橋病院倫理審査委員長（2016年12月まで）
 2010年4月 東邦大学西穂高診療所運営委員長（2022年3月まで）
 2012年7月 東邦大学医療センター大橋病院院長補佐（2015年6月まで）
 2016年4月 東邦大学医療センター大橋病院認知症ケアチーム
 2019年11月 東邦大学医療センター大橋病院脳死判定委員

学会の役職：日本神経学会代議員・施設認定委員会委員・アーカイブ委員会委員

日本神経治療学会理事・会則あり方委員長・広報委員会委員長・国際化委員会委員長など

第38回日本神経治療学会学術集会会長（2020年10月28日～30日）

日本末梢神経学会理事・コメディカル対応委員会委員

受賞：1997年7月 PNS fellowship award 1997, Peripheral Nerve Society

研修医発表表彰式 松澤康雄

閉会の挨拶 大橋 靖

東邦大学医学部佐倉病院 総合内科医局前期1年目研修医発表プログラム

日時：2023年3月13日（月）

会場：東邦大学医療センター佐倉病院 7F 講堂

前期研修医発表

1. PCI 施行後にステント血栓症を起こし、治療に難渋した急性冠症候群の1例

三谷幸平

指導医名：伊藤拓朗（Cグループ）

53歳、男性。急性冠症候群に対し緊急PCIを施行するも、翌日ステント内血栓症を認め、再度PCIを施行した。その後も胸痛などの症状が繰り返し出現し治療に難渋した1例を経験した。過去の文献とあわせて報告する。

2. 正中弓状靭帯症候群によって前下脛十二指腸動脈瘤が破裂した一例

熊谷美咲

指導医名：岩下裕明（Dグループ）

56歳男性。上腹部痛、嘔吐が出現し、救急搬送された。精査の結果、正中弓状靭帯症候群によって前下脛十二指腸動脈瘤が形成、破裂していたという珍しい症例であり、文献的考察を交えて報告する。

3. 診断に難渋した血便の一例

高安涼太

指導医名：菊地秀昌（Dグループ）

貧血を伴う血便を繰り返す26歳男性。下部小腸内視鏡で潰瘍を伴う小腸憩室を認めた。腹腔鏡下小腸部分切除を施行し、術中内視鏡を行った症例を経験したため、文献的報告を交えて報告する。

4. 妊娠中に嚢胞感染を発症した常染色体優性多発性嚢胞腎の1例

佐藤安佑子

指導医名：石井信伍（Fグループ）

常染色体優性多発性嚢胞腎（ADPKD）はしばしば嚢胞感染を合併し、難治化する。ADPKDに既往歴があり、妊娠14週に嚢胞感染を発症した34歳女性に対し、セフェム系抗菌薬を選択し、良好な経過を辿った1例を報告する。

5. 骨盤内腹腔内多発リンパ節腫脹の一例

小林弘明

指導医名：菊地秀昌（Dグループ）

症例は75歳男性。倦怠感、体重減少と共に進行する貧血の精査目的で紹介受診。骨盤内腹腔内に多発リンパ節腫脹を認めるも、原因疾患の特定に難渋した症例につき、文献的考察を交えて報告する。

6. DLBCL 寛解後低血糖で救急搬送され再発と診断された 1 例

仁ノ平健太

指導医名：渡邊康弘，山岡周平，清水直美 (B グループ)

悪性リンパ腫（寛解後）と 2 型糖尿病の既往がある 70 歳女性。リンパ腫の再発に伴う高 Ca 血症と多尿に伴う腎前性腎不全，SU 薬遷延により低血糖を生じた。悪性腫瘍に関連した高 Ca 血症に関し文献を交え報告する。

7. アザシチジン，ベネトクラクスで血液学的寛解に到達しえた高齢者 AML の一例

田中裕里

指導医名：清水直美，阿部一輝，田中 翔 (B チーム)

78 歳女性。全身の骨痛を主訴に受診。WBC 367,860 (Blast 93%)，Hb 7.8，PLT 12.1，LDH 509，PO 陽性芽球を認め AML M1 と診断した。入院後アザシチジン，低用量ベネトクラクスの併用により寛解した症例を経験した為，文献的考察を踏まえ報告する。

8. ヘパリン起因性血小板減少症 (HIT) 発症後，ヘパリン再投与に成功した一例

田中辰樹

指導医名：石井信伍 (F グループ)

73 歳男性。原疾患不明のネフローゼ症候群で透析導入後，ヘパリン起因性血小板減少症 (HIT) の診断でヘパリンをアルガトロバンに変更した。HIT 抗体陰性を確認後，ヘパリン再使用を試み，成功した 1 例を報告する。